「表裏頭脳（リバースブレイン）　ケンイチ」

第１話「物理部の悲劇と目覚めた人格」

毎日の積み重ねに起きた「変化」も、毎日の積み重ねによってそれは「当たり前」へと変わっていく。…それこそがどうってことのない「当たり前」であって……

陽・賢「いってきまーす！」

父「おう！気をつけてなぁ。」

玄関から、リビングにいる父親の陽一郎に元気にあいさつをし、陽と賢一の姉弟は玄関のドアを出た。姉の陽がドアを閉めている間に、弟の賢一は愛用の自転車のスタンドを外し、玄関の前まで押してくる。

賢「ひな、カバン。」

陽「あ、ありがと。」

渡された陽のカバンを、賢一はすでに自分のカバンが入っている自転車のカゴの中に入れ、サドルにまたがる。

陽（Ｍ）「私の名前は宗光陽。閏台高校に通う高校２年生。で、自転車を漕ぐこの子は神童賢一くん。訳あって９年前にお父さんが引き取った男の子で、私より１つ歳下の高校１年生。苗字は違うし、血も繋がってないけど、私にとっては大事な弟。…私の家、お母さんが私が小さい時に病気で死んじゃったけど、お父さんやヨシくんのおかげで、そんなに寂しいって思ったことはないんだ。」

賢「ちゃんと掴まっててよ？」

陽「大丈夫！じゃ、今日もお願いしますね。」

どこかわざとらしく敬語でお願いする陽を、賢一はどこか楽しそうに見てから前を向く。

賢「了解しました！…じゃあ、行くよ！」

賢一も先ほどの陽と同様にわざとらしい敬語を使った後、勢いよく地面を蹴って自転車を走らせた。道端の街路樹は春らしい、小さな葉を茂らし始めている。

陽（Ｍ）「こうやって、２人揃って登校するのが私たちの当たり前。自転車は中学生になってからだけど、「２人で登校」っていうことは、ヨシくんが家族になってからずっと変わっていない。弟相手に変だって思われるかもしれないけど、私にはそれが毎日の小さな幸せの１つだったりすることを、ヨシくんは知っているのかな…？」

自転車で約１５分の距離にある学校にいつも通りの時間に到着し、生徒玄関で靴を履きかえた陽と賢一は、廊下で待ち合わせてはお互いの教室に向かって歩いていた。

陽「そう言えばさ、宿題終わったの？」

賢「宿題？」

陽「ほら、昨日数学のプリントやってたじゃない。あれ、宿題なんでしょ？」

賢「ああ～、あれね。……諦めた。」

陽「諦めたって、また？…もう！」

陽（Ｍ）「ヨシくんは運動神経は抜群なんだけど、いまいち勉強は苦手みたいで、宿題を諦めるなんて日常茶飯事。取り組まないよりはずっとマシなんだろうけど、高校は義務教育じゃないから、いつもヒヤヒヤしちゃう。でも、もしかしたら勉強はというより、頭を使うのが苦手なのかな？」

そんな話をしているうちに、２人は２年生の教室がある３階まで階段を上りきる。

賢「じゃあ、また後でね！」

陽「うん！」

陽（Ｍ）「この「後」っていうのは、放課後の事。別に家で、って訳ではないんだけどね。……こうして私たちの当たり前な毎日は始まる。……でも、今日をきっかけに、その当たり前が当たり前でなくなっていくなんて、この時の私にはわかるはずもなかった……」

放課後、下校時間を知らせる１５時４５分のチャイムが鳴り響く中で賢一や陽を含めた６人の男女が、演劇部の部室の隣にある狭い一室に集まっていた。

晶「あー！！ネタ、ネタ、ネタ！！ネタがない、ネタがぁ！」

イライラとした様子を隠すこともなくそう言うのは、ここメディア部の部長であり唯一の３年生、響鬼晶である。それから晶は、ふと思い立ったようにキッと２年生の１人を睨んだ。

晶「修丸ー！！」

修「ハ、ハイッ！！」

修丸と呼ばれた、オドオドとした挙動を目立つこの男子生徒は、２年生の湯堂修丸。治そうと努力はしているらしいが、部活一のビビり屋で有名である。

晶「ネタの提供がお前の仕事だろうが！仕事しろ仕事！」

修「そ、そんなこと言われても…」

そんな様子を見て、金髪な上に制服もろくに着こなしていない２年生が面白そうにニヤニヤと修丸を見る。

隆「職務怠慢たあ、いただけねえなあ。」

この男子生徒は、修丸のクラスメートである近宮隆平。面白いこと好きで部活のムードメーカーであるのだが、賢一同様に頭の方はあまり良くなかったりする。そんな隆平に、自分の席で黙々と本を読んでいたメガネの２年生が、目線を本からそらさずにひどく呆れた口調で言う。

孝「取材先のアポ取りしかしないお前に、そんなこと言えるのか？」

この男子生徒は、幾永孝彦。１年の時から図書委員と部活を両立してきた読書好きであり、やや融通が利かない面も持っている。そして何より、ウマが合わないのか隆平とは中学の時からのケンカ相手である。

隆「なんだと、孝彦！アポ取りバカにすんなよな！コールセンターでのバイトに精を出している俺だからできる仕事であって…ってか、お前こそ活動中に本なんか読みやがって！そんな奴に説教されたかねえよ！」

そう言って、隆平は孝彦の読んでいた本を取り上げた。

孝「あ、返せバカ！」

隆「誰がバカだ、誰が！」

晶「うるさーーーい！！」

その一言に、部室がシーンと静まり返った。…が、修丸を除く誰一人として驚いて静まり返ったわけではなく、ただたんに晶を疲れさせてはいけないと言う配慮からのだんまりだった。

賢「晶センパイってホントに怒りっぽいんだね……」

１年生であるがゆえに入部して日の浅い賢一は、少し怖がるように陽にそう言う。

陽「怒りっぽいっていうか、苦労してるのよ。いろいろ……」

苦笑気味にそう答える陽。そんなひそひそ話しにも気づかずに、晶は隆平と孝彦の方を見る。

晶「毎日毎日、なぜ飽きない？！お前らのケンカのせいで活動が進まないのがわからないのか！！」

隆・孝「だってコイツが！……マネすんな！！」

声を合わせて反論しようとしたかと思えば、今度はそのことに対して声をそろえる２人に、晶はわなわなと震えだした。

晶「お前ら～…いい加減に―」

と、その時。晶の言葉を遮るように部室のドアが開いたかと思うと、そこに立っていたのはカメラを首からぶら下げた２年生と、同じようにビデオを首からぶら下げた、学ランの男の子の２人だった。

路「はい、そこまで！」

海「もう～、またケンカですかぁ？」

晶「龍路、龍海！」

修「遅かったですね、２人とも…」

カメラの２年生は、孝彦のクラスメートである佐武龍路。部内で唯一円滑に隆平と孝彦のケンカを収める強者で、カメラの腕と面倒見の良さはピカイチだったりする。そしてその隣の学ランは、龍路の２つ年下の弟で、閏台中学３年生の佐武龍海。ビデオと龍路が大好きな甘えっ子であり、中学生でありながら高校のメディア部に入り浸ってもはや２年目である、賢一の唯一の後輩だったりもする。

路「ああ、中学に龍海迎えに行くついでにほら、ちょっとフィルムとビデオテープ買ってきたんだ。」

海「そろそろ新しい記事書かなきゃでしょ？どんな記事を書くにしたって、取材準備はちゃんとしとかないと！」

龍海のその一言に、部室内はまた静まり返った。

海「あれ？…ねえ兄ちゃん、僕なんか変なこと言った？」

路「そうだなぁ、変じゃなくても、まずいことは言ったかもな…」

海「まずいこと？」

悪気もなく龍路にそう訊く龍海に、修丸はばつ悪そうに言った。

修「あ、あの、その…ネタがないんです…」

海「あー、そゆことですか…」

同じくばつ悪そうに納得する龍海に、晶が半ばやけくそ気味にその肩に手を当てて言った。

晶「龍海！中学でなんか記事になりそうなネタはないか？！」

海「えー、そんなこと言われてもぉ…僕はビデオ録画担当でネタ集め要員じゃないし、それに一応、中３の受験生だし…」

孝「受験生って…お前の中学とうちの高校は一貫教育なんだから受験なんてないだろうが。」

孝彦の言う通り、閏台中学と閏台高校は中高一貫教育システムの採用校であり、中学に入ってしまえば高校の試験は免除される。また、中学は平凡な学校だが、高校の方が部活の実績が高い学校であるため、高校からの編入希望者が多いのも現実である。

海「でも、どっちにしったって３年生の勉強は忙しいんですぅ！ネタなんか探してる暇ありませんよ。」

孝「だったら、中坊のくせに兄貴の部活に顔出す暇もないんじゃないのか？」

隆「バカ、メディア部準所属の龍海になんてこと言うんだよ！」

孝「準所属ってなんだよ。ってか、バカはお前だろうが。」

隆「んだと、このメガネ！」

孝「言ったなこの―」

路「お前ら、んっとに暇なんだなぁ……」

龍路の言葉に、２人は言葉を失った。

路「ほら、ケンカなんかしてる暇があるならさ、修丸の手伝いでもしてやろうぜ？」

孝「そ、それもそうか…」

隆「ま、ネタがなきゃあ俺らの担当の仕事もないしな…」

そんな様子を見て、賢一はまた陽とひそひそ話し始めた。

賢「龍路センパイって、すごいなぁ。ホントしっかりしてるよね。」

陽「ええ。孝彦くんも隆平くんも、龍路くんにはかなわないのよね。」

場が落ち着いたのを見計らい、晶が言った。

晶「よし！今日の活動内容を決めたぞ！」

修「はあ、何をやるんですか？」

晶「今、龍路が言った通り…全員でネタ集めだ！」

その言葉に、修丸こそは嬉しそうな顔をするが、他の部員は皆それぞれに嫌そうな顔、もしくは苦笑をする。

孝「待ってくださいよ……俺は情報収集係だし、第一んなことしてたら全員に役割振ってる意味ないでしょ？」

晶「だから、ネタがないとみんな役割の仕事ができないだろ？ってかお前、さっき龍路の意見に賛成してたじゃないか。」

孝「いや、あれはその場の勢いというか……」

困る孝彦を見て、陽も少し困った様子で晶を見る。

陽「でもセンパイ、せっかくみんな部室に集まったのに、ネタ集めって今からやるんですか？」

晶「今からやんないでどうすんだよ？……さあ行っくぞー！」

１人楽しそうな晶だったが、つい先ほどからなぜか廊下の方をじっと見ていた隆平が苦笑しながら、晶を見る。

隆「いや、でも今からは無理じゃないスかね？」

晶「は？」

隆「いや、だって多分先生だと思いますけど、誰か来てますよ？」

その時、隆平の言葉通りに静かに部室のドアが開いた。

賢「あ……」

入ってきた女生徒を見て、小さくそんな声を漏らす賢一だったが、陽がなんとなく気付いただけで、他の部員は賢一の反応には気付いていない。

晶「ったく、お前の地獄耳、いつもながらすごいな。」

隆「すごいっつーか、ただ勝手に聞こえてくるだけなんスけどね。」

隆平は人並み外れた聴力を持っていて、今のように閉めたドアの向こうの足音にいち早く気付くのはいつものことであった。

孝「でも、先生じゃなかったよな。」

いつの間にか読書を再開していた孝彦が、どこか嫌味っぽく言い放つ。

隆「別にいいじゃねえか！誰だってよ！」

篠「あ、あの…」

孝彦と隆平がケンカを始める前に、メディア部を訪ねてきた女生徒が口を開いた。赤いネクタイから見るに、１年生のようである。

路「ああ、ゴメンな。えっと君は…」

不思議そうにそう言う龍路を見て、女生徒は優しく笑って言った。

篠「あたし、神童くんのクラスメートで、物理部１年の篠原美紅っていいます。」

路「へえ、賢一のクラスメートねえ。」

納得するようにそう言う龍路をよそに、隆平が自分の席から立ちあがり、まるで格好をつけるように入り口近くに立っている篠原の手を握った。

隆「はじめまして、美紅さん。ボクはメディア部のエース、近宮隆平と申しま―」

最後まで言い終わる前に、晶のゲンコツが隆平の頭の上に振り落とされた。

隆「ったあー！！ちょ、センパイ！何するんスかぁ！」

晶「誰がエースだ、誰が！部長は自分だっつーの！ってか！お前は女の子相手にすぐそーいう態度取るの止めろ！！」

そんな晶を見て、篠原がおかしそうに笑う。

晶「な、なんだよ…」

篠「すみません…！でも、部長さんが神童くんに聞いてた通りだから…」

そう言う篠原に、晶は不思議そうな顔をしている。

賢「ちょ、ちょっと篠原さん！」

賢一が慌てて篠原を止めようとする。

孝「聞いてた通り？」

隆「そうさな、そりゃきっと男女（おとこおんな）だってことじゃねーの？」

言い終わるや否や、晶による２発目が入った。

隆「って～！！」

晶「女って言うな！ったく、虫唾が走る…」

隆「いや、女じゃなくて、男女―」

晶「どっちでもおんなじだろうが！」

賢「でも晶センパイ、僕、前から聞こうと思ってたんですけど、なんでそんなに女って言われるのが嫌なんですか？わざわざジャージ登校までして…」

悪気のないその言葉に、部室内は一気に「ヤバイ」雰囲気に見舞われる。…が、賢一にそう言われて、晶は静かに自分の席に座った。

晶「あのなぁ賢一、自分が女らしくしてるとこ、想像できるか？」

部室はまたまた静まり返る…

賢「えっと……」

孝「お言葉ですけど、できませんね。」

言葉に詰まる賢一を見て、孝彦が助け舟（？）を出す。

晶「お言葉かどうかは知らんが、想像できないだろ？できなくていいんだよ。だから自分は男らしく生きてんだ！文句は言わせん！」

修「あ、いえ…別に文句はありませんけど…」

少し怖がるような修丸を見て、晶は少しバツ悪そうに篠原の方を向いた。

晶「……（汗）で！？篠原さんって言ったっけ？わざわざ部室まで来るなんてどうしたんだ？」

篠「あ、はい…あの、メディア部って調べものとかが得意だって聞いたんですけど…」

海「ええ！調べて書くのが仕事ですから！」

晶「中学生は黙ってろ！」

海「は～い…」

撃沈する龍海をよそに、晶が少し困ったように篠原に言った。

晶「んで、調べものだったな。うん、確かに他の部活に比べたら、得意と言えば得意だが…」

そう言う晶に、篠原は何かを言おうとするも、ためらっているようだった。

篠「あの、実は昨日の夜―」

その一言に、部員全員が不思議そうに篠原を見た。と、その時。ドアをノックする音が聞こえ、真剣に篠原の話を聞いていた部員たちはビビリの修丸でなくともみな驚いてドアの方を見る。

鳩「おーい、開けてくれ！」

賢「えっと、鳩谷先生……？」

声を聞いてそう言う賢一が部室のドアを開けてあげると、そこには模造紙のロールが何本も入った段ボールを持った、メディア部顧問の鳩谷知人が立っていた。

鳩「ふう……ありがとな神童。」

賢「いえ。」

鳩「それにしても近宮、俺の足音聞えなかったのか？」

隆「いやぁ、ちょっと取り込み中でして～……」

そんな隆平を少し不思議がりながら部屋の隅に段ボールを置く鳩谷に、龍海が不思議そうな顔をする。

海「先生～、なんですか、それ？」

鳩「なんですかって、お前たちそろそろ次の記事を書く時期だろ？だから職員室に余ってた模造紙持ってきてやったってのに…って、佐武の弟！お前また高校に来てるのか？」

海「だってぇ……あ、そうだ！僕、ここの準所属なんですって！だからいいじゃないですかぁ！」

路「すいません、先生。コイツの面倒は俺がちゃんと見ますんで。」

鳩「まったく、中学生が高校の部活に入り浸るなんて聞いたことないぞ！」

そんな中、修丸が驚いた表情のまま固まっていることに、孝彦が気づいた。

孝「ん？どうした、修丸？」

修「い、いえ……先生のノックが、まだちょっと……」

孝「お前、本当にビビリだよなぁ。にしても隆平、篠原さんには気づいても先生には気づかないなんて、お前の地獄耳も役に立たねえな。」

隆「うるせえな、だからさっきは話に集中してたんだよ！」

その時、篠原が気まずそうに静かに席を立った。

晶「どうした？」

篠「いえ、なんか忙しそうだから、また今度にします…」

そう言う篠原を見て、なぜか賢一はイヤな感じを覚えた。

晶「そうか？まあ、そう言うなら―」

賢「あの！！……その、別に忙しいってことは、ないんだけど…」

そんな賢一を、みんな不思議そうな顔で見る。

陽「どうしたの、急に…」

賢「あ、いや…話の続き、聞きたいなあって…」

だんだんと語尾を弱める賢一に、鳩谷が不思議そうに訊く。

鳩「話？そう言えば君は神童と同じクラスの篠原だよな？メディア部になんか用でもあったか？」

篠「あ、大した用じゃないんです。じゃあ、また来ますね…」

晶「おう、いつでも来い！」

入り口付近で軽く会釈してから部室を後にした篠原だったが、賢一は１人、とても不安そうな顔で篠原が締めていったドアをじっと眺めていた。

陽「ヨシくん…？どうしたの？」

賢「あ、いや…なんでもない……（なんだったんだろう…さっきのあの感じ…）」

そうは答えつつも、賢一は不安の色を隠せないままに篠原が出て行ったドアをじっと見ていた。

篠「明日、また訪ねてみよう……」

部室を出て行った篠原だったが、誰かが物陰からその姿を見ていたことに、誰も気づかなかった…

？「…ッチ」

部活動が終わり、賢一が漕ぐ自転車の後ろで陽はフッと聞いた。

陽「ねえ、さっきどうしたの？」

賢「さっきって？」

陽「ほら、篠原さんに話聞きたいって言ってたじゃない。なんていうのかな、あの時のヨシくん、ちょっと変だったよ？」

賢「……」

陽「ヨシくん？」

賢「僕もよくわかんないけど、なんか、あのまま帰らせちゃいけない気が、なんかイヤな予感がしたんだ。…まあ、気のせいだと思うけどさ。」

陽「ふ～ん…変なの。」

その言葉通り、この時陽は今日の賢一の言動、今の言葉をさほど気には留めなかった。

次の日、何事もなかったかのように朝が来て、そして放課後はやってきた。

メディア部の部室では、晶が昨日以上にイライラとした様子で、自分の席で貧乏ゆすりをしていた。

孝「晶センパイ、今日は一段とイラついてんなぁ。」

修「ですね……なんかあったんでしょうか？」

晶「なんか…？」

修丸の言葉を聞き、晶は修丸を睨んだ。

修「え…！？」

晶「お前がしっかりせんから、ネタがなくてイラついてるんだろうが！！よくもまあ、ネタを手ぶらで部室に出入りできたものだな、オイ！役割分担の時に、「ネタ集めなら任せてくださ～い」とかなんとか言ってたのはどこのドイツだぁ？！」

ここぞとばかりに怒りが爆発する晶に、修丸は今にも逃げ出しそうな勢いで必死に謝る。

修「ごめんなさい～～～！！」

海「も～、晶センパイったらぁ、部長は部員を大事にしてナンボでしょお？」

ビデオを回しながら晶を映す龍海を、晶はキッと睨んだ。

晶「うるさい中学生！！ってかビデオ回すの止めい！！」

海「だ、だって…最近面白いものぜんぜん撮ってないから―」

晶「だったら記事と関係あるものだけを撮ってろ！このビデオバカ！」

海「うぅ…兄ちゃあ～ん！！」

そう言いながら、龍海は泣きながら龍路の胸に飛び込んだ。

路「おー、よしよし、怖かったなあ。兄ちゃんの胸でたぁんとお泣き。」

優しくそう声をかけ、龍海の頭をなでてやる龍路。しっかり者の龍路でも、弟龍海のこととなるとブラザーコンプレックス丸出しである。

海「あ～ん！」

晶「こら龍路！お前龍海に甘すぎだぞ！」

路「そんなこと言っても、俺コイツの兄貴ですし。」

海「そーですよ！！それにビデオも写真も、もっと自由に撮ってイイモノなんですぅ！」

晶「お前らなあ…ってか、特に龍海……言ってる事メチャクチャだぞ？」

孝「ま、佐武兄弟のおかげで出来のいい写真や映像を使えるんだから、そこは我慢しないと。」

言葉とは裏腹に、呆れ加減がうかがえる孝彦の口調。

晶「それはあくまで、ネタがあっての話だろ？！ったく、結局昨日はなんの収穫もなかったし…賢一の言う通り、篠原さんの話、ちゃんと聞いときゃよかったよ……」

陽「それにしても篠原さん、何を相談しようとしてたのかしら？」

隆「さあなぁ。それがわかれば、センパイの怒りも収まるってもんだ。」

修「ハイッ？！」

なぜかいきなり返事のような反応をする修丸に、部室は静かになる。

隆「……「修丸」じゃなくて、「収まる」だよ。ったく、紛らわしい名前しやがって…」

孝「隆平お前なあ、人の名前からかうんじゃねーよ。」

別に本人にその気はないのだろうが、相手が隆平となるとすぐに揚げ足を取ろうとしてしまうのが孝彦の悪い癖であり、今回は違えどもその逆もしかりである。

隆「別にからかってなんかねーよ、バカメガネ！」

孝「な、誰がバカメガネだと？！」

隆「バカでメガネな部員が他にいますかねぇ？孝彦さんよぉ！」

孝「テメェなぁ！何度も言わせんな！バカはお前だろ―」

路「お前らさ……これ以上晶センパイの神経刺激するなよな。」

海「そーですよぉ！まったく、隆平センパイも孝彦センパイもおバカさんなんだから。」

悪乗りする龍海だったが、すかさず晶に睨まれる。

晶「龍海、お前もイライラの種だってこと、忘れてないだろうな…」

海「そ、そー言えば！賢一センパイと篠原さんって、クラスメートですよね？！昨日の話とか聞かなかったんですか？！」

慌てた様子を隠すことなく、部室に来てからずっと黙り気味の賢一を見てそう言う龍海。

晶「コイツ…」

路「話を逸らしたな…」

海「で、どうなんですか？」

賢「いや、まあそうなんだけど…篠原さん、今日は学校を休んだんだ。そりゃ、まだ入学して１か月くらいだけどさ、今まで１回も休んだことなんてなかったのに…」

隆「疲れて寝てたんじゃねーの？昨日の様子からして、なんか悩んでたみたいだし、それで寝不足とか。」

賢「だと、いいんですけど…」

その一言に、みんなが不思議そうに賢一を見た。

賢「あ、いや…！なんでもないです、なんでも―」

その時だった。勢いよくドアが開いたと思うと、鳩谷が慌てた様子で部室に入ってきた。

鳩「大変だぞ、お前たち！」

隆「大変って、何がっスか？」

鳩「それがな、…さっき物理部員たちが見つけたんだが…死んでるんだ。…篠原が物理準備室の中で…」

賢「！！」

鳩谷の言葉を聞いた瞬間、賢一は血相を変えて部室を飛び出した。

隆「お、おい賢一？！」

陽「待ってヨシくん！！」

賢一を追うように他の部員たちも部室を出たが、足の速い賢一の姿はすでに部室のある廊下からは見えなくなっていた。

部員たちは人だかりのできた物理室や物理準備室の前で部員たちが賢一に追いついたが、話しかける暇もなく賢一は人をかき分けて物理準備室に入ろうとする。

晶「ったく、ひどい野次馬だな！」

人の多さにそうぼやく晶だったが、ふと龍路が準備室に近いところに立っている賢一を見つける。

路「おい、待てよ賢一！」

賢一を見つけた龍路に続くように部員たちも準備室の入り口を目指した。そこには、教師に抑えられる生徒たち、その手前くらいのところで立ち尽くす賢一、そして準備室の中で苦痛に顔をゆがめて死んでいる篠原がいた。

修「し、篠原さん……！」

海「そんな…なんで…！？」

教師「こら！入るんじゃない！」

他の生徒たち同様に教師に抑えられながらも口々にそう言うメンバーをよそに、何も言わない賢一の様子を不思議がった陽は、気まずそうに賢一の肩に手を当てた。

陽「ねえ、ヨシくん大丈夫―」

陽が声をかけた瞬間、賢一はその場に崩れ落ちた。

陽「ちょっと、ヨシくん？！」

賢「…の…だ…」

晶「なんだって…？」

賢「僕のせいだ…」

そう言って、賢一は両手で頭を抱え始める。

隆「おい、お前何言って―」

賢「僕が強く止めなかったから…」

孝「止めなかったって…」

賢「昨日、帰ろうとするのを止めてれば…！あの時ちゃんと話を聞いてれば、篠原さんは……こんなことには……」

そう言った瞬間に賢一は強い動悸に襲われ、頭を抱える両手に異常なまでに力が入る。

賢「うわああああああ！」

陽「ヨシくん！…ねえ、ヨシくん！！」

路「おい、大丈夫か賢一！」

賢「……」

みなが心配する中、賢一は気を失うようにその場に倒れ込んだ。

陽「気絶してるわ…」

修「気絶……ですか？」

海「ショック、だったんでしょうかね……」

隆「で、でもよ…それだけで気絶なんかするか？」

晶「んなこと言ったって放っておくわけにもいかんだろうが。……とにかく、保健室運ぶぞ！」

晶の言葉を受けて、メディア部の中で一番背の高い龍路が賢一を負ぶった時にはすでに、篠原を発見した誰かが呼んでいたのか、外ではパトカーのサイレンが聞こえ始めた。

メディア部部室では、賢一と陽を除く６人がそれぞれに何かを考えていた。

晶「賢一たち、遅いな…」

路「かれこれ、１時間くらいですかね？」

時計を見る晶につられるように龍路も時計を見る。

修「賢一くん…大丈夫でしょうか……」

孝「篠原さんが死んだこと、すごく気にしてたからな。……なんか様子も変だったし。」

そう言う孝彦は、本を開いてはいるものの、いっこうにページが進んでいない。

海「でも、篠原さんどうして亡くなったんでしょうね？あんなところで、しかもあんな顔して……」

隆「なんか、すげー苦しそうな顔してたよな。」

そう言って、隆平は小さく何かに反応してドアの方を見る。

孝「どうした？誰か来たか？」

隆「ああ、たぶん……」

隆平がそう言っている最中、ドアが開いて鳩谷が入ってくる。

鳩「明田先生に聞いたけど、神童の奴、篠原を見て倒れたそうだな……」

晶「ええ、今陽が保健室で付き添ってるんですけど、１時間くらい経ってるのにまだ帰ってこなくって……」

賢一の状態を説明する晶だったが、待ちきれないと言ったように隆平が口を開く。

隆「ねえ先生！篠原さん、なんで死んだんですか？！…普通あんなとこで死んだりしないでしょ？！」

その言葉に、鳩谷は少し顔色を曇らせる。

鳩「ガスを吸ったそうだ…」

修「ガスって、どういうことですか…？」

鳩「今、警察が物理準備室の調査をしてるんだが、なんでも洗剤の入ったバケツが物理準備室で見つかったそうだ…それがまた、物理部と科学部、それから化学部の３つの部活で共通して使っているものらしいんだよ。」

孝「あの…洗剤でガスって、もしかして塩素ガスですか？」

鳩「ああ。警察の言うところでは、科学部か化学部が入れたままにしていた塩素系の漂白剤か洗剤を、水と間違えてそのまま洗剤を入れたんじゃないかってところらしい。……今物理部で使っている洗剤を見たら、酸性の洗剤だったらしいからな。」

隆「塩素ガス？洗剤？どーゆーことだ？」

隆平が訳もわからないと言った顔で困り果てる。

孝「ったく、ホントにバカだなお前。んなことも知らないのかよ…」

隆「はあ？！誰がバカだって？！」

孝「お前以外に誰がいるんだよ？」

隆「俺がバカならお前だってバカだろうが！」

孝「なんだと、この―」

修「ちょ、ちょっと２人とも落ち着いて―」

隆・孝「お前は黙ってろ！」

修「す、すみません！」

そんな様子を見て、龍路がため息をついた。

路「お前らなぁ…！今はケンカしてる場合じゃないだろ？…人が１人亡くなってるんだ…」

孝「あ…悪い…」

隆「そう、だよな…」

少しの沈黙の後、孝彦が隆平の方を見た。

孝「いいか、結構常識的なことだから覚えとけよ？塩素系の薬品と酸性の薬品を混ぜると、人体に有毒な塩素ガスが発生するんだ。それを吸いすぎると呼吸困難などを引き起こし、最悪の場合死に至る…」

その口調は、淡々としながらも丁寧だった。

隆「死…」

海「あれですよね、「混ぜるな危険」って奴……うちのお風呂場にそんな洗剤、置いてありますもん……」

それから、また少しの沈黙が続いた。

鳩「篠原、とても真面目な子なのに今日の授業は無断欠席していたから、おかしいとは思っていたんだが…」

修「連絡、なかったんですか？」

鳩「ああ。それどころか、担任が篠原の家に電話してみたところ、昨日から家にも帰ってないと言うんだ。…おそらく、昨日の部活の後に、１人で部室の掃除でもしたんだろうな。」

晶「そうか…しかし、そんな事故で死んでしまうなんて…」

その時、いきなりドアが開いた。

賢「お前ら、揃いも揃ってバカなのか？」

そこに立っていたのは、賢一とおどおどしている陽の２人だった。しかし、賢一はどこか雰囲気が違って見えた。

晶「賢一！お前、大丈夫なのか―」

賢「気安く賢一なんて呼ぶんじゃねえ！」

その一言と剣幕に、部員や鳩谷はビクついた。

隆「な、何言ってんだお前？！」

賢「フン…オレの事より、この殺人のことをもっと考えた方がいいんじゃないのか？」

鳩「殺人？何を言ってるんだ……これは事故だって警察が―」

賢「寝言は寝て言え。」

鳩「…え？」

賢「あの状況を事故だと言い張ることの、どこをどう取って寝言じゃないと言うんだよ？ったく…」

修「あ、あの状況って、どういうことですか？」

賢「篠原が死んでいた物理準備室だよ。いいか？さっき見た限りでは、準備室の窓は閉まっていた。わかるか？有毒ガスが発生した部屋で、窓が閉め切っているのはおかしいだろ？」

陽「……そっか、普通だったら真っ先に窓を開けるかも。」

ふと思いついたようにそうつぶやく陽の言葉に、賢一はつまらなさそうな表情で小さくうなずく。

賢「塩素ガスは黄緑の有色ガスなうえに、匂いもする。どんなバカだろうと異変に気付かないはずはない。…それから、篠原がいた場所だ。」

隆「いた場所？そりゃ物理準備室―」

賢「オレが言いたいのはそんなことじゃない、この能無しが。」

隆「～～！」

あっさりとそう言い捨てる賢一に、隆平は悔しさから何かを言おうとするも、上手い言葉が出てこない。

賢「篠原の死体は、ドアの近くにあった。それも、片手を伸ばした状態でな。」

路「お前、よくそんなことまで憶えてるなぁ。…でも、それのどこが変なんだ？」

賢「窓が開いていないことに何か理由があるとして、おそらく篠原はドアから外に出ようとしてあんなところにいたんだろう。だが、結果的に篠原は外に出ることなく息絶えた。」

孝「言われてみれば、確かに妙だ！」

隆「だから、何が？」

少し突っかかるような言い方の隆平に、孝彦も少しムッとする。

孝「だって、たとえカギがかかっていたにしろ、懲罰房じゃないんだから内側から開けられるだろ？しかもドアは部屋の中に向かって開く内開きだ。外に物を置いたってドアは開くじゃないか！」

隆「た、確かに！」

賢「つまり、普通に考えればあそこから外に出られない理由は何１つとして見つからない。…なのにだ、篠原は部屋から出なかった。」

路「なるほど、改めて考え直すと、事故にしたらおかしな点が多いな。洗剤の入ったバケツとガスって聞いたせいで、先入観だけで考えちまってた……」

そんな龍路を無視するように、賢一は何かを考え出したかと思うと、部員たちの方を向き直った。

陽「ちょっと、どこ行くの？」

賢「物理準備室だ。」

晶「は？なんで……」

賢「見ただけじゃわからないことを確認しに行く。事故で片付けるくらいなら、警察ももう引き上げただろうからな。」

そう言って部室の外に向かって歩き出す賢一。

海「行っちゃった…」

路「それにしても賢一の奴、一体どうしちまったんだ？いつもと雰囲気が違いすぎるって言うか……あれ、ホントに賢一なのか？」

修「あんな高圧的で冷静な賢一くん、見たことありませんよ…」

晶「まったく…なあ陽、保健室でなんかあったのか？」

その問いに、陽はどこか不安げにうつむく。

陽「それが…」

そう言って、陽は保健室での出来事を話しだした。

―陽「（ヨシくん…昨日からなんか変だし、どうしちゃったのかな…）」

気を失ってベッドで寝ている賢一に付き添っている陽は、賢一のことが心配でたまらなかった。その時、保健室の引き戸が開く。

陽「明田先生…」

賢一と陽だけの保健室に、養護教諭の明田が入ってきた。

明「ごめんなさいね、宗光さん。ずっとついていてあげられなくて。」

陽「いえ、あんなことがあって先生方も忙しいでしょうし…こうして様子を見にきてくれるだけでも嬉しいです。」

明「そう？そう言ってもらえると助かるわ。…神童くん、まだ寝てる？」

陽「ええ、相変わらず…でも先生、ショックで気を失うことってあるんですか？」

明「そうね…あんまりないことだけど、１００％ないとは言えないわ。…亡くなった篠原さんは神童くんのクラスメートだったみたいだし、それにほら、この子は他の子に比べて……ね？」

少し言いにくそうにそう言う明田に、陽は不安げに言う。

陽「普段はそんなこと、感じさせないくらい強い子なんですけど……」

そんな陽を、明田も心配そうに見る。

明「そうね……でも、神童くんが抱えてる不安の中身って、私たちにはきっと理解できないじゃない。だから、それが一気に爆発したって　可能性もあるでしょうね……」

陽「そう、ですね……あの、実はヨシくん、昨日からなんか変だったんです。」

明「変って、何かあったの？」

陽「昨日、篠原さんが相談したいことがあるって言ってメディア部に来たんですけど、騒がしくなっちゃって、結局落ち着いてからまた来るって言って帰ろうとしたんです。その時、ヨシくんすごい必死に篠原さんを止めて、話を聞こうとしてて…まるで、今話を聞かないともう聞けなくなるような、そんな勢いでした……」

明「そう、そんなことがあったの…まるで、篠原さんが今日亡くなることを予知してたみたいね。…なんて、そんなことあるわけ―」

賢「みたいじゃない。予知してたんだよ。」

どこか苦笑気味にそう言う明田の言葉を遮った声は、ベッドのある方から聞こえた。

陽・明「え！？」

驚いた２人がベッドを見ると、さっきまで寝ていたはずの賢一が、窓の外を見つめて上半身を起こしていた。

陽「ヨシくん！…よかった、ヨシくんったらいきなり倒れちゃうから心配したんだよ！」

賢「気安く呼ぶんじゃねえよ。」

陽「え…？」

驚く陽に、賢一は振り向いて見せた。その顔つきは、いつもの温和な賢一ではなかった。

陽「あなた、ヨシくんよね…？私の弟の賢一くんだよね……？」

賢「フン……オレに名前なんてない。…気安く賢一なんて呼ぶな。」

そう言って、賢一はベッドから降りて保健室の入り口まで速足で歩き始めた。

明「ちょ、ちょっと待って！予知してたってどういうこと？！」

明田の言葉に賢一は一瞬足を止めたが、答えも振り返りもせず、また歩き出した。

明「どこに行くの？！」

賢「うるせえよ。」

賢一はそう言い放ち、なお足を止めようとせずに引き戸を開ける。

陽「待って！」

陽は慌てて賢一の後を追って行った。―

晶「そんなことがあったのか…」

陽「はい…。私にも、何が何だかわからなくて。でも、彼はヨシくんじゃない…それだけはわかるんです…！」

晶「陽…」

孝「でもよ陽、確かに様子は変だったけど、あれはどう見ても賢一だったじゃないか。」

陽「そうだけど…でも、やっぱり違うの……」

隆「まあ、姉のお前がそう言うんだったら、そうなんだろうな。」

陽「あの、私物理準備室に行ってきます……なんだか彼、心配だから…」

晶「そうだな…あの様子じゃ、物理部の反感を買いかねないし…（汗）……よし！だったら自分も行くよ。お前や賢一の部活の部長だからな！」

陽「センパイ…ありがとうございます。」

控えめにも嬉しそうな陽に、晶も快く言う。

晶「おう。」

そう答えて、晶は部員たちを見る。

晶「で、お前らどうする？」

その言葉に、隆平がどこか嬉しそうに言う。

隆「え、もしかしてついてっていいんスか？！」

晶「まあ～、自分いないとお前ら活動もしないんだろうからなぁ……」

なぜか悩ましげにそう言う晶だったが、その真意に気付かずに隆平はさらに嬉しそうに言う。

隆「だったら一緒に行きまーす！」

孝「隆平が行くんなら、俺も行きます。……コイツ放っておくのは不安でしかないんで。」

本を閉じてそう言う孝彦に、隆平はすぐに突っかかる。

隆「はあ？なんだよ、お前は俺の保護者かっての！」

孝「誰がお前みたいな子供を持ちたがるんだよ？」

隆「テメェ―」

路「センパイ、俺も行っていいですか？賢一のことも、事件のことも気になるし……」

ごくごく自然に２人のケンカを予防し、なおかつ自分の意見を述べる龍路に晶も感心しながら言う。

晶「ああ、いいぞ。…で、龍路が来るなら―」

海「僕も行きまーす！！」

元気にそう言って、龍海はふと思い出したかのように修丸を見る。

海「センパイどうするんですか？」

修「あの、僕も行きます。…龍路くんも言ってましたけど、篠原さんが事故で死んだんじゃないってのがすごく気になるので。」

そして晶は部員たちを見回して、どこか少し嬉しそうに言う。

晶「よし、そうと決まればさっさと行くか。」

鳩「響鬼、悪いが任せてもいいか？俺はちょっと職員室に戻らなきゃいけないんだが。」

晶「ええ、大丈夫ですよ。そんじゃ行ってきますね。」

そう言って、晶たちと鳩谷は一緒に部室を出た。

メディア部が物理室に行くと、５人の男女が心配そうに、物理室と準備室を繋ぐドアから物理準備室を覗いていた。

晶「失礼しま～す……」

熊「あれ……君は確か、メディア部の…」

晶「メディア部部長の響鬼晶だ。前の部長会議であっただろうが…えっと…」

熊「物理部部長の熊谷勇斗。…お互い様じゃないか。」

苦笑気味に笑う熊谷に、晶も苦笑する。

晶「ここに、１年男子が来なかったか？神童っつって、うちの部の１年なんだけど…」

霧「ああ、来ましたよ。いきなり「準備室を見せろ」なんていうからびっくりしましたよ。」

そう言うのは物理部の２年生、霧江治則である。

陽「この中にいるのね？」

川「あ、待って！」

準備室に入ろうとした陽を、物理部２年の女子、川西絵梨が止める。

陽「え？」

川「今は入らない方がいいわ。」

修「どうしてですか？」

霧「俺らもさっき、何してるんだろうって入ろうとしたら怒られてさ。こう、なんつーの？怒鳴られたわけじゃないんだけど、うん。あれは怖かったよ。」

少しだけ怪訝そうな霧江に、龍路は苦笑して言う。

路「まあ、アイツいつもはあんなんじゃないんだけどな…」

霧「そうなのか？」

龍路の話に、霧江は意外そうな顔をする。

川「でも彼、一体何をしてるのかしら？」

隆「なんでも、篠原さんが死んだのは事故じゃ―」

陽「何をしてるって訳じゃないんじゃないかしら？…あの子、篠原さんとはクラスメートだったから、きっと事故のことが特別気になってるんだと思う。」

隆「あ…」

隆平の言葉を遮る陽を見て、隆平は陽の意図を理解した。

遠「美紅…あたしが昨日部活休まなかったら、一緒に掃除してたら死ななかったのかな…」

メディア部が来たことも気にもせず、物理部の１年、遠藤由佳が泣きそうな声で言った。

海「え？どういうことですか？」

寺「部活動の後の掃除は、１年生がやることになってるんだ。しかし、篠原の奴、なんで換気扇も回さず、部屋を閉め切って掃除なんかしてたんだ…！」

川「寺尾先生……」

悔やむように言う寺尾を、川西が心配そうにその顔を覗く。

賢「おい。」

その一言に、話に集中していた物理部及びメディア部のメンバーは驚いた。

川「え？！」

いつの間にか、物理準備室を見ていたはずの賢一が物理室へと戻ってきていた。

賢「お前じゃない。……おい、その掃除ってのは、いつも同じことをやるのか？」

遠「え？ええ…使った実験道具を戻して、それから掃き掃除、最後に棚を掃除するの。それで準備室と物理室の鍵を閉めて職員室に戻して、あたしたちも帰る。いつもそんな感じだけど…」

賢「洗剤を使うのは、その棚の掃除のときか？」

遠「そうよ。床は掃くだけだけど、棚はいつも洗剤を使って水拭きしてるから。」

賢「……」

遠藤の話を聞いてから少し考え込んだ後、賢一は寺尾に向き直った。

賢「お前にも聞きたいことがある。」

寺「なんだい？」

賢「準備室には、電灯と換気扇のスイッチはないのか？」

寺「ああ。物理室の電灯や換気扇のスイッチと同じところに、準備室のスイッチがあるんだ。ほら…」

そう言って、寺尾は物理室の廊下側の角に歩いて行き、そこにあるスイッチ盤を指した。

賢「誰か、篠原を見つけてからあのスイッチをいじった奴はいるか？」

そう言う賢一の言葉に、物理部員たちは互いに顔を見合わせはじめる。

寺「私はいじってないが、お前たちはどうだ？」

熊「え？俺はいじってませんけど…」

霧「俺もっす。川西は？」

川「あたしもいじってないわ。」

遠「まだ明るいから電気はつけなくていいし、換気扇はずっと回してるし…」

物理部員たちの短い会話を聞いて、賢一は何かに気付いたように目を細めた。

賢「…。おい、佐武のガキ。」

海「へ？ガキって僕のこと……？」

いきなり呼ばれて、思わず自分を指差す龍海に、賢一は苛立たしげに言った。

賢「お前以外に誰がいる？お前、確か篠原の死体を見に来た時にビデオを回してたな？」

海「え？ええ、部室で晶センパイからかった後でしたから…」

賢「見せろ。」

海「え……？見せるって―」

賢「いいから見せろ！」

海「は、はい！」

賢一の剣幕に押され、龍海は少し泣きそうな声で返事をすると、手に持っていたビデオカメラのモニターを開き、例の場面を再生しだした。

海「ここからでいいですか？」

しかし、賢一は何も答えない。

海「えっと…」

路「おい、なんか言ってやれよ…」

賢「とめろ……」

海「は、はい！」

静かにもいきなりそう言う賢一にまたビビりながらも、龍海は賢一が止めろと言った場所でビデオを一時停止させた。

賢「やはりそうか…」

少しだけだが、驚いたような顔をする賢一。

海「え？」

孝「やはりって、何が？」

賢「なぜだ…」

孝彦の問いにも答えず、賢一はさらに自問し始める。その顔はどこか嫌悪を含んでいるようだった。

孝「なあ、聞いてるのか？…っておい！」

孝彦が話している最中に、賢一は廊下に出ようとドアに向かって歩き出した。

隆「お前、どこ行くんだよ？！」

賢「……帰るんだよ。これ以上ここにいても時間の無駄だからな。」

そう言ってから、賢一は先ほどとは違う嫌悪をあらわにする。

賢「それに、お前たちのようなバカと一緒にいるだけでひどく疲れる。」

そう言い捨て、物理室を出て行った。

晶「な、なんて自己中な…」

修「陽さんの言う通り、確かに賢一くんはあんなこと言いませんもんね……」

賢一が帰った後の物理室は、呆れと驚きに包まれていた。

部室に帰ってきたメディア部のメンバーは、部室の中を見て唖然とした。

隆「い、いねえ…アイツ帰るっつったじゃねえかよ！」

海「あ、もしかしてさっきの帰るって、家にって意味だったんでしょうか…」

路「らしいな。ほら、ホワイトボード見てみろよ。」

狭い部室を大幅に陣取るホワイトボードをじっと見てそう言う龍路の言葉に、みなホワイトボードを見た。

修「明日までに物理部について、篠原を殺す動機があるかどうか調べておけ。それくらいならバカでもできる。……ですって。」

たどたどしくボードの言葉を読み上げる修丸。

路「仕事丸投げってことは、家に帰ったって事だろ？」

孝「そんなことはどーでもいいよ。…しっかし隆平だけならまだしも、俺たち全員に向かってバカとは…」

隆「はあ？それどういう意味だよ！」

孝「この部活で一番のバカはお前だろうが。」

隆「誰がバカだ、誰が！」

そんな２人を見て、龍路が呆れた顔で何か言おうとしたが…

晶「だー！！もういい！２人ともバカだ、大バカだ！！ったく……それよりも賢一の奴、疲れたからって自分らに仕事押し付ける気かよ！？…ん？」

陽「…」

無理矢理隆平と孝彦のケンカをぶった切った晶は、ふと不安そうにしている陽に気が付いた。

晶「陽、お前ももう帰れ。」

陽「え？でも…」

晶「賢一のことが心配なんだろ？…ん？いや、アレは賢一ではないのか？いやでも賢一は賢一だし…」

自分で言っておいて、よくわからなくなってしまう晶に、陽は少し戸惑う。

陽「あ、あの…」

晶「ああ、悪い。とにかくだ。どっちにしたってこの調べものは今日は無理だし、自分らで誰が誰を担当するかを決めておくから、お前はアイツのことを頼んだぞ。」

快くそう言う晶に、陽は遠慮がちに小さく笑う。

陽「すいません、晶センパイ…じゃあ、お言葉に甘えて、今日は帰りますね。」

晶「おう！……ま、ゆっくり休めよ。」

陽「はい。」

陽は、どこか申し訳なさそうに部室を出て行った。

陽「あれ？」

家に帰ろうとして、いつもの癖で駐輪場に来てしまった陽は少し驚いた。そこには賢一の自転車が置いてあるままだった。

陽「自転車置きっ放し……ってことは、歩いて帰ったのかしら？」

そう思った陽は、駆け足で正門を出た。

陽「待って！」

賢「ん？」

陽は歩いている賢一を見つけ、やっと追いついた。しかし、ずいぶん前に学校を出たはずではあるが、陽が思ったよりも賢一は学校に近い場所を歩いていた。

陽「ねえ、自転車どうしたの？」

賢「フン…。あんな転ぶためにあるようなモノ、誰が乗るか…」

陽「まあ…確かに「自ら転ぶ車」って書くけど……あ、もしかして、乗れない…とか？」

賢一の話に陽は最初苦笑していたが、ふと聞きづらそうにそう切り出す。

賢「何度も言ってるが、オレは神童賢一じゃない。アイツのような力も、運動神経も持ってねえんだよ。」

陽「でも、それでも自転車くらい乗れるんじゃ―」

賢「悪いか？」

陽の言葉を遮った賢一は、不機嫌さと恥ずかしさを入り混ぜたような顔をしている。

陽「え？」

賢「自転車くらい乗れなくて悪いか？」

陽「べ、別にそんなことはないけど…」

賢「フン…。自転車の乗り方なんぞ、理屈でしか知らねえんだ。どうでもいいこと気にしやがって……」

恥かしさが消え、不機嫌さだけを残して賢一は足早に陽の前に出る。

陽「（ヨシくんはあんなに運動神経がいいのに…やっぱりこの子、ヨシくんじゃないんだ…）」

家に帰って、賢一は夕食も食べずにさっさと２階にある自分の部屋で寝ていた。陽はドアを少し開けて賢一の様子をそっと見に来ると、カーテンも閉めずに壁際を向いて横になっている彼の背中を見て複雑そうにドアを閉め、１階のダイニングで夕食の片づけをしている陽一郎のもとへ手伝いに戻った。

父「どうだった？」

陽「ぐっすり…っていうか、なんかふて寝みたい。」

賢一が家に来るよりも前に病で妻を亡くし、再婚もせずに男手１つで２人の子供を養ってきた陽一郎は、仕事はもちろん、家事も母の代わりにずっとこなしてきている。そんな父を想い、宗光家では普段はできる限り、３人で家事をすることが日課になっているが、今日は陽が賢一の分も頑張っているのである。

父「そうか…」

陽の話にそう答える陽一郎。その後の少しの沈黙の後、陽が口を開いた。

陽「ねえお父さん……ヨシくん、どうしちゃったのかな？……昨日からなんか変だったし、それも関係あるのかな？」

父「そうだな…お前の話からすると、多重人格ってやつかもしれん。性格や知性の変化、それに、運動神経の塊のようなあの賢一が、普通は小学生でも乗れるような自転車にすら乗れなくなったっていうのも、気になるしな。」

陽「でも、だからってなんで今頃そんな人格が現れるのよ…？」

父「なんでって言われてもなぁ……もしかしたら、あの事と関係があるのかもしれんぞ？」

陽「あの事って、ヨシくんの記憶の事？」

父「ああ。賢一には家に来る前の、小学校に上がる前の記憶がない。その６年間の間に、今回の異変に関する何かがあったのかもしれない。もしくは、その事に対する不安から―」

賢「バカなこと考えてる暇があったら、少しはそのバカな頭を何とかしたらどうなんだ？」

話し込むあまり、陽一郎も陽も賢一がいつの間にかリビングに来ていたことに気付かず、いきなりの声に驚いた。

父「賢一！お前、いつの間に…」

賢一の名を呼ぶ陽一郎に、賢一は嫌悪感をあらわにする。

賢「オレは賢一じゃねえ。ソイツから聞いてねえのかよ。」

陽「ごめんなさい、言うの忘れてたわ。それよりもいつ起きたの？」

賢「フン…。起きるも何も、寝てなんかねーよ。」

どこかつまらなさそうな口調の賢一に、陽は思わず驚く。

陽「え？でもさっき、部屋覗いたら…」

賢「窓の外見て、考え事しちゃいけないのか？」

陽「い、いえ…」

冷蔵庫を勝手に開けて何かを探す賢一。

父「君は、何者なんだ？」

その一言に、賢一は冷蔵庫をあさる手を止めた。

父「賢一じゃないんだろう？だったら君は誰なんだ？」

賢「誰でもねーよ。」

陽「でも、あなたはこうして存在してるじゃない。誰でもないってことはないでしょ？」

冷たく言い放つ賢一だったが、考え付いたわけでもなく自然と陽の口からそう語られる。

賢「フン…。神童賢一の体を有する、神童賢一以外の存在。これで満足か？」

そう言い放って、賢一は飲み物の入ったペットボトルを取り出し、冷蔵庫を乱暴に閉めた。

陽「…。」

賢「なんだよ、その顔は…」

陽「ヨシくんは、どこにいるの？」

賢「安心しろ…賢一はちゃんとオレの中にいる。それは確かだ。」

陽「そう、なの？」

賢「ああ。」

陽「じゃあ、いつヨシくんに戻ってくれるの？」

賢「フン…。くだらねえことを気にしてんじゃねえよ。」

そう言って賢一は部屋に戻ろうとした。

陽「ちょっと、待ってよ！」

その一言に、賢一は歩を止めた。

賢「今は戻れない。今、アイツを出すわけにはいかねえんだ。」

静かにそう言い放ち、賢一は階段を上っていった。

父「今は…？」

陽「どういう意味だろう…」

次の日、いつもの賢一に戻ったわけではないが、それでも陽に説得された賢一は渋々学校に来ていた。そして今は昼休みである。

賢「（ったく、宗光の奴……こんなつまらねーところに引っ張り出しやがって…）」

そう思った賢一の脳裏に、今朝、陽から言われた言葉がよぎっていく。

―陽「学校は行かなきゃだめよ。ヨシくんはちゃんと勉強ができないなりに、毎日ちゃんと学校には通ってるの。あなたが何者かはわからないけど、傍から見ればあなたはヨシくんなんだから！」―

賢「…ッチ！」

そう舌打ちした賢一だったが、ふと後ろの席に座っている男子２人の会話が聞こえてきた。

男１「くっそ、弁当箱開かねえ！」

男２「バッカ、詰めすぎじゃねえの？」

男１「そんなに詰めてねーよ！」

男２「ちょっと貸せよ…って、あっち！」

男１「さっき、コンビニのレンジで温めてきたからな！」

男２「それ、早く言えよ！」

その様子を密かに見ていた賢一は、心なしか驚いた表情を隠せずにいた。

賢「（…弁当箱が、開かない？）」

放課後、賢一は１人物理室の前に来ていた。物理室の下はちょうど音楽室だからか、吹奏楽部の練習が聞こえている。６時間目が終わってそれほど時間が経っていないことから見ると、おそらくは自主練であろう。

賢「（まったくうるさい部活だ…昨日のように活動休止していればいいものを…）」

そんな事を思いながら、賢一は静かにドアを開けた。そこには複雑そうな顔をして、黒板のチョーク置き場でチョークをいじっている熊谷がいるだけだった。

賢「ずいぶんと集まりが悪いんだな……」

熊「君……メディア部の、神童くんだっけ？」

小さく驚いてそう言った後、、熊谷は苦笑する。

熊「ほら、まだ３時半にもなってないじゃないか。……俺が早すぎるだけで、別に集まりが悪い訳じゃないさ。」

そう言う熊谷を、賢一はどこかつまらなさそうに見ている。

熊「で？君こそこんな時間にメディア部にも行かないで、なんでこんなとこに？」

賢「準備室をもう一度見に来た。…それくらいバカでもわかるだろう。」

表情を変えずにそう言う賢一に、熊谷は真剣な顔をする。

熊「だろうね。……ちょっと待ってくれるか？」

そう言いながら、熊谷は準備室のドアについた小窓から準備室の向こうを見る。賢一もその隣に立って寺尾の姿を確認する。

熊「先生……あの、メディア部の神童くんが準備室を見たいって来てるんですけど……」

ドアを開けて心配げにそう声をかける熊谷の目線の先には、準備室の窓際に置かれた大きめのビーカーに活けられた花に向かって、目をつぶり合掌をしている寺尾の姿があった。寺尾は熊谷の声に気付いて目を開け、熊谷と賢一を見る。

寺「ん？……ああ、そうか。」

熊「調べさせてあげていいですか？」

寺「別に構わないよ。…亡くなった篠原も、君の熱心な気持ちに喜んでくれているだろうしな…」

そう言って寺尾は物理室へと歩いてくる。そのすれ違いざまに賢一はふと何かに気付くように寺尾を見た。

寺「何かわかんないことがあったら、熊谷に訊いてくれ。私は職員室に戻るから。」

賢一に見られたことも気付かずにそう言って、寺尾は物理室を出て行ったが、賢一は寺尾が物理室を出て行くまでずっと彼を見ていた。

熊「どうしたんだ？」

不思議がる熊谷に、賢一は目線を花に移して言う。

賢「あの花、寺尾が活けたのか？」

熊「ん？ああ、そうだよ。今日学校来る前に買ってきたんだって。あ、ビーカーに活けようって言ったのは俺だけどね。あのビーカー、今の１年生専用にしてた奴だからさ、その方が篠原もなじみがあるかなって思って。……でも、それがどうしたんだ？」

賢「いや……」

そう言って言葉を呑む賢一。

賢「なんでもねえよ。」

そう言いながら賢一は準備室に入って行く。そんな賢一を、部屋の境目で不思議そうに見ている熊谷だったが、そんなことはお構いなしに窓際で回っている換気扇の近くへと歩み寄っていく。

賢「（この換気扇、給排気型か…）」

それから何かを探すようにきょろきょろしたかと思うと、ふと目立たないところに置いてある、埃をかぶった機械を見つけた。しかしコードの束にはついている埃は、まだらである。

賢「これは…真空ポンプか？」

機械を真空ポンプと呼ぶ賢一を不思議がることもなく、熊谷はどこか懐かしそうに真空ポンプを見る。

熊「今年の新入生歓迎会の実験で使ったっきり使ってないな。授業でも使わないみたいだし。ま、あったらあったで、また来年の歓迎会かなんかで使うだろうけどさ、今はまともに埃も払ってないなぁ～…」

賢「これは、他の部員や寺尾も使えるのか？」

熊「ん～、遠藤と亡くなった篠原は知らなかったかもしれないけど、２年生と俺、寺尾先生は使えるはずだよ。」

賢「じゃあ、ここにコレがあることを知っているのは？」

熊「う～ん、授業では使わないモノだって寺尾先生は言ってたから、俺たちだけじゃないかな？結構前に買ったものらしいから、他の先生だって知ってるかどうか……あと、篠原と遠藤は知らなかったかもしれないな。あの２人の性格だったら、こんなとこで埃かぶってる機材を見つけたら、きっときれいに拭いてるだろうし。」

賢「その話、本当だろうな？」

真空ポンプを見つめたままにそう言う賢一に、熊谷はどこか緊張気味に答える。

熊「あ、ああ…？」

賢一は物理室を後にして、先ほどの準備室の様子を思い出していた。

賢「（もしや、とは思ったが……真空ポンプ、そんなものがあそこにあったとは盲点だったな。コードに埃がたまってなかったところを見ても、最近使われたことは明らか…だとすれば、あの事もうなずける…）」

準備室で見聞きしたことと今までの疑問を照らし合わせながら廊下を歩いていた賢一だったが、偶然物理室に向かう遠藤を遠目に見つけ、その手に１輪だけ花を持っていることに気が付く。

賢「（アイツは、物理部の遠藤。部活に行くってだけで泣きそうな顔しやがって……）」

そして、ふと悲しげな表情になる。

賢「（死んだ人間が１人なら、悲しむ人間は何人なんだろうな……）」

その頃部室では、ホワイトボードにたくさんのメモ帳が貼ってあった。

海「すごいすごい！昨日の放課後と今日だけでこんなに調べちゃうなんて！」

晶「みんな頑張ったなぁ……さすがはメディア部員、といったところか？」

心から感心したようにそう言う晶に、孝彦が言う。

孝「コイツと組まされでもしたら、こうもいかなかったでしょうけどね。」

隆「へっ！そりゃ俺のセリフだ！」

孝「なんだと―」

路「おっと悪い。俺の調べたのも貼らせてくれよ。」

そう言って龍路がホワイトボードにメモを貼ると、晶はまた感心した。

晶「お！お前のメモはずいぶん見やすいな。」

路「俺が写真を撮るしか能がないと思ったら大間違いですよ？写真家とメモ魔は紙一重！ってか、それ以前にしっかり調べてきたんですから、篠原さんと遠藤さんの関係を。」

賢「ったく、そんなことで浮かれて、お前らホントにバカなんだな。」

ドアを開けて入室一言目、そう言い放つ賢一に、部室は気まずい沈黙に包まれた。

陽「ちょ、ちょっと…」

賢「調べろと言われて調べられないようなら切り捨ててたところだが、だからと言ってそんなに騒ぐことでもねえだろうが。」

晶「お前な、昨日からなんなんだよ―」

賢「とにかく…」

そう言って賢一はドアを乱暴に閉め、ホワイトボードを眺めに来た。

賢「お前らの取ったこのメモ、全て間違いはないんだな？」

晶「ああ、もちろんだ！物理部顧問の寺尾正造先生と篠原さんに悪い噂はなかったぞ。そもそも、寺尾先生は授業もわかりやすいし、生徒のこともしっかり見ているって、生徒、保護者ともに評判がいいからな。人柄を考えれば、殺人なんてことはできないだろう。」

賢「篠原から見てはどうだったんだ？」

晶「それはわからんな。なにしろ本人が死んでしまったんだから。」

路「それだったら、俺わかりますよ。」

晶「ホントか？」

路「ええ、俺の担当は１年生の遠藤由佳さんでしたからね。１年生同士ってことで部活内でも仲が良かったらしく、よくいろんな話をしていたそうです。その中で、寺尾先生のことを、優しくて真面目な人だと尊敬していたとも話してました。」

賢「遠藤と篠原はどうだったんだ？」

路「ああ、さっきも言ったけど、１年同士ってことで仲が良かったと。…ただ、遠藤さんは少し引っ込み思案なところがあるらしくて、篠原さんに軽くコンプレックスを抱いていたのも確かみたいだけどな。」

賢「コンプレックス、か……」

路「ああ。遠藤さんのクラスメートが言ってたんだ。「篠原さんの、思ったことを面と向かって言えるあの性格が羨ましい」って愚痴る時があったって。」

賢「…。おい、１年は遠藤だけか？」

路「ああ。あとは２年が２人と、３年の部長１人だけだ。２年生を担当したの、お前らだよな？」

隆「ああ。俺は３組の霧江治則に話を聞いてきたけど、アイツは篠原さんとはあんまり接点がなかったらしい。…というのもだ。霧江は篠原さんのあの真面目な性格が少し苦手だったんだと。だから必要最低限、関わらないようにしていたってさ。」

修「へえ、川西さんとは真逆ですね。」

賢「川西……もう１人の２年生だな。」

修「はい。４組の川西絵梨さんなんですけど、彼女は篠原さんや遠藤さんのことを可愛がっていたみたいです。部活外でも、よく３人で、もしくは後輩のどちらかと２人で出かけたりしてたようですから。」

賢「で、残る１人はどうなんだ？」

孝「ああ、３年の熊谷勇斗部長なんだけど、彼も特に篠原さんとの悪い話は聞かなかったよ。熊谷部長は、部活だけじゃなくてもテスト時期とかは部員に勉強教えたり、頼られる存在らしくてな、篠原さんも熊谷部長のことは頼りにしていたんだと。」

賢「これで物理部の関係者は全員か？」

晶「ああ。」

賢「なるほどな…」

そう言って、賢一は黙り込んだ。

海「何かわかりました？」

賢「いや、どいつもこいつも篠原を殺す動機はイマイチだ。……おとといの篠原のあの様子、物理部の人間と何かあったんじゃないかと踏んでいたんだが……」

路「動機はイマイチか…じゃあ、アリバイとかはどうだ？ほら、殺人事件と言えば、よくアリバイを確かめたりするだろ？」

賢「フン…アリバイなんてあってないようなものだ。鳩谷が昨日言ってただろう？篠原は今日は無断欠席をしているうえに、昨日は家にも帰ってなかったと。そして、死体となって発見されたのが今日の放課後。これらのことを踏まえると、篠原が殺されたのは、メディア部を訪ねてから発見されるまでの間となるが…警察が事故として処理した以上、篠原の死んだ時間は割り出されていない。しかも物理部は他の部活に比べて活動時間が短い。その分部員が自由に動き回れる時間も多い。つまりだ、これだけ時間幅が広ければ、アリバイから犯人を割り出すのは難しいだろう。」

賢一の話に、部員たちは納得したのか誰も何も言わない。そんな中、ふと陽が口を開く。

陽「確かにそうね…でも、思ったんだけど、物理部だけを疑ってて大丈夫なの？」

賢「犯人があの中にいることは間違いない。」

修「え？何でですか？」

賢「篠原を準備室に閉じ込めたカラクリを使えたのは、物理部員と寺尾の５人しかいないんだ。…まあ、１年の遠藤は微妙なところだがな。」

陽「え？！」

晶「お前、窓やドアが開かなかった理由がわかったのか？！」

驚く部員たちだったが、賢一はそれを鬱陶しそうに見てから静かに言う。

賢「真空だよ…」

海「真空？」

賢「厳密に言えば、減圧状態だ。……密封された部屋ってのは、外との気圧の変化でドアや窓が開かなくなる。それが減圧状態だ。そして、あの物理準備室には空間を真空に近づけることのできる、真空ポンプが置いてあった。おそらく、あの部屋を減圧状態にするために使われたんだろう。」

隆「しんくうぽんぷ……？」

賢「なんだ、知らないのか？」

不思議がる隆平に、賢一はまるでバカにするようにそう言う。

隆「けっ！悪かったな！どーせ俺は何にも知らないバカだよ―」

賢「まあ、知らなくて当然だがな。」

隆「へ？」

賢「真空ポンプなんて、タダの高校生の知るところじゃない。だからこそ、犯人は真空ポンプの使い方を知っている、物理部の２，３年生と顧問の寺尾に限られるのさ。」

隆「お、俺、遊ばれた？」

狐に化かされたような顔で、咄嗟に近くにいた修丸を見る隆平。

修「た、多分…」

隆「な…？！このヤロ―」

路「でも、遠藤さんは？さっき、遠藤さんは微妙だとも言ってたよな？」

いつもの調子で、隆平がケンカを売り出す前に龍路が遮る。

賢「熊谷の話が本当だとしたら、今回の犯行を除いて、最後にポンプが使われたのは今年の新入生歓迎会だそうだ。」

陽「そっか、１年生の遠藤さんは、その時は入部してた訳じゃないから！」

賢「そういうことだ。まあ、他の３人や寺尾に使い方を聞いていた、もしくはすでにあのポンプの存在や、使い方を知っていた、となれば話は別だがな。今の段階で遠藤を白だとするのはまだ早いだろうな。」

賢一の話を聞いて、部員たちは各々に自分たちの調べた事実をもとに考え出す。

隆「だとしたら、一番怪しいのは霧江じゃねえの？アイツが一番篠原さんとの仲が良くなかったみたいだしよ。」

海「でも１年生の遠藤さんも、篠原さんにコンプレックスを抱いてたみたいですし…先輩方から真空ポンプの使い方を聞いていたって可能性もあるんでしょ？」

修「あの、川西さんはどうでしょうか？物理部員の中では一番仲が良かったっていいますけど、逆にそれがもつれたって可能性も…」

晶「それを言ったら熊谷だって怪しく思えてきたな…仲良くしているのは表面上だけだとか…」

孝「表面上の関係かぁ…だったら、寺尾先生にも同じことが言えるんじゃないですか？」

晶「そうだなぁ…」

路「誰も怪しくはないって思ってたけど、こうなると全員怪しく思えちまうな……」

海「ねぇ～……」

そんなやりとりを見ながら、賢一が呆れたようにため息をついた。

陽「どうしたの？」

陽が恐る恐る聞く。

賢「バカといると、本当に疲れる……」

賢一は独り言のように、隣にいる陽ですらやっと聞こえるような小さな声でつぶやいた。

隆「おいこらそこ！！バカって言うのもいい加減にしろ！」

陽「嘘……隆平くん聞こえたの？！」

隆「ケッ！俺の地獄耳舐めんなよ！」

賢「フン……何が地獄耳だ。そんなしょうもない事を自慢してる暇があったら少しは―」

そう言いかけて、賢一の脳裏に昨日の部室での出来事がよぎった。

―孝「篠原さんには気づいても先生には気づかないなんて、お前の地獄耳も役に立たねえな。」

隆「うるせえな、さっきは話に集中してたんだよ！」

その時、篠原が気まずそうに静かに席を立った。

晶「どうした？」

篠「いえ、なんか忙しそうだから、また今度にします…」―

賢「そうか…だからあの時…」

隆「おい、俺の地獄耳をしょうもないとは何事だ―」

隆平の話も聞かず、賢一は立ち上がって部室の外に出ようとした。

隆「こ、こら！お前また人の話も聞かずに―」

陽「何かわかったの？！」

陽にまで話を遮られ、隆平はショックを受けた様子だった。

賢「犯人の見当がついた。……本人から直接動機聞き出して、テメエのせいじゃねえって教えてやるんだよ。」

そう言って、賢一は部室を出た。その言葉にみな賢一が何を言いたいのかを理解できずにいたが、ハッと思い出すかのように陽が立ち上がる。

陽「あ、待って！私も行く！」

そう言って、陽も賢一を追うようにして部室を出る。

晶「お、おい！…たくっ！自分らも行くぞ！」

晶は不機嫌そうに頭をかいたのち、修丸の手を引っ張った。

修「え？…あ、ちょっと！」

そんな２人を見て、龍路は少し困ったように龍海の顔を見る。

路「えっとぉ…」

海「僕らも行こ、兄ちゃん？」

路「そうだな。」

お互いに小さく笑い、佐武兄弟も部室を出る。

隆「……。ったくよぉ、置いてけ掘りは勘弁だぜ！」

孝「同じく……ってか、あそこまで話聞かされて、犯人が気にならない方がどうかしてる。」

残った２人も、隆平は意気揚々と、孝彦はどこか呆れたように部室を出た。

物理室には、先ほど賢一が来た時にはいないメンバーも含めて、今は全員がそろっていた。

遠「え？！」

音が鳴るほどにいきなりドアを蹴破る賢一に、声を上げた遠藤のみならず、物理部員４人と寺尾はひどく驚いた。

霧「おい！いきなりなんなんだよ！」

隆「あ、それ俺らのセリフ！……ったく、お前な、いきなり他の部の部室のドアを蹴破る奴があるか！」

賢「フン…。」

相変わらずのつまらなさそうな返事をするだけで、賢一は悪びれる様子もない。

熊「また君か……今度は何だ？また準備室を見せてくれとでも？」

さすがの熊谷も、怒りこそしないがどこか苦笑気味である。

賢「その必要はもうない。」

川「え？じゃあ、一体何の用でここに？」

賢「篠原の仇（かたき）を討ちに……なんて殊勝な事を言う気はないが、篠原がどうやって、そしてどうして殺されたのかを教えてやろうと思ってな。」

その一言に、物理部員たちはみな驚きを隠せない。

川「ちょ、ちょっと！殺されたって、何言ってるの？！」

寺「そうだ！篠原は、その…事故で死んだんじゃ…」

賢「寝言は寝て言え。」

寺「え…？」

賢「あれは殺人だ。有毒ガスからの退路を塞ぎ、確実に被害者を死に至らしめる、きわめて単純かつ残忍な方法を用いた……」

熊「退路を塞ぐ？なんのことだ？」

陽「えっと…普通、ガスが発生したら窓を開けたり、外に出たりするでしょう？なのに篠原さんはそのどちらもしなかった。それはどうしてか、ってことよね？」

賢「ああ。…厳密に言えば「しなかった」ではなく「できなかった」だがな。」

遠「どういうこと？」

賢「まあ、順を追って説明していく。まず重要なのは、あのバケツが科学部、化学部、物理部の３つの部活で共用しているという事だ。よりたくさんの集団が１つのバケツを使うということは、中に塩素系の漂白剤や洗剤が入っていても、それが殺意があってのことだとは誰も思わず、しかも誰がそれを入れたかを特定しづらくなり、至極自然に事故を装わせることができることに繋がる。そして２つ目に重要な事は、掃除の内容、および順序が暗黙のうちに決まっていたことにある。」

修「あの、それのどこが重要なんです？」

賢「洗剤を使う作業が、最後にあるところだ。」

熊「最後に？」

賢「ああ。篠原が洗剤を使う作業を始める前、つまり自ら有毒ガスを発生させる前に犯人はあの部屋にあった真空ポンプのスイッチを入れてから、篠原を１人準備室に残し、ドアを閉めたうえで換気扇を止めたんだ。……ポンプの作動音も、活動時間の短い物理部が終わっても練習している、下の階の吹奏楽部の音に紛れちまうだろうしな。」

遠「真空、ポンプ？」

賢一の出したワードに、遠藤は首をかしげている。そのことに気付いた川西は思い出すように説明を始める。

川「ほら、新入生歓迎会で圧力の実験を見せたでしょ？その時に使った機械の事よ。」

その説明の最中に、霧江が何かを思いつく。

霧「あ！もしかして減圧状態か？！」

霧江のその言葉に、賢一はどこか小さくだが、不敵な笑みを浮かべる。

賢「ああ。犯人が準備室から出て、部屋を密室にしてから篠原が洗剤を使う作業に入るまでの掃き掃除や片づけをしている間に、密閉された準備室は外よりも気圧が低くなり、減圧状態になる。…物理部や物理教師のお前たちなら、これくらい知ってて当然だろう？」

寺「そうか！そうしたら窓もドアも、まるでカギをかけたかのように開かなくなってしまう！…だから篠原はあの部屋から出られなかったのか…」

賢「そういうことだ。窓もドアも開かず、換気扇を回すにしてもスイッチは物理室にしかない。篠原がいつもの流れで洗剤をバケツに入れ、塩素ガスを発生させてしまった時は、退路はすでに塞がれた後だったというわけさ。」

隆「ひでぇ…」

賢「あとは篠原が死んだ後、夜でも朝でもいい。誰かがドア越しに篠原を発見する前に、ドアが開かないという不可解な点を消し去るために減圧状態を元に戻してやれば、犯行は終了だ。ここの換気扇は中の空気を外に出すと同時に、外の空気を取り入れる給排気型だから、換気扇を回すだけでそれは可能だからな。まあ、逆にそれでドアも窓も開く状態に戻してしまったがために、「事故だとしたら、なぜ窓を開けたり外に逃げなかったのか」という疑問につながったわけだが。」

海「だけど、犯人はどうやって換気扇のスイッチのある物理室に入ったんですか？普通、部活や授業で使わない時ってこういう部屋はカギをかけるでしょ？」

ふと不思議そうにそんな疑問を口にする龍海だったが、龍路がそれに気付く。

路「いや、カギをかけるのは掃除を担当している１年生で、昨日は１人だけだった１年生の篠原さんはカギをかける前にこと切れたんだから、物理室も準備室もカギは開きっ放しという事になるんじゃないか？」

海「あ、そっか！じゃあ、誰でも物理室に入ることはできたんだ！」

疑問の解決に、どこか嬉しそうにそう言う龍海だったが、その言葉が物理部員たちにある事実を思い知らせる。

熊「でも、待てよ…？そうなると、俺たち全員、篠原を殺すことができたってことじゃないのか？」

賢「全員、ではないだろう。少なくとも部活を休んでいて、かつ真空ポンプの使い方を知らない遠藤に、この犯行は不可能だ。…さっきの様子じゃ、遠藤は真空ポンプ自体を知らなかったようだからな。」

川「ってことは、美紅ちゃんを殺せたのは部長、あたし、霧江の中の誰かってこと？…あ！そう言えば、あんた美紅ちゃんの事、苦手だって言ってたわよね！」

疑いの色を濃くして霧江を見る川西に、霧江は慌てる。

霧「バ、バカ言うなよ！苦手だからってなんで殺さなきゃいけないんだよ！」

熊「霧江、お前…！」

霧江を見る熊谷も、どこか疑心暗鬼な目をしている。

霧「ちょ、部長まで！」

賢「…自分たちで犯人を割り出そうとしているところ、悪いんだが、大事なことを忘れてないか？」

遠「え？」

そう言って、賢一は静かにある人物を見る。

賢「この犯行が行えたのは、何も生徒だけじゃないってことだよ。…なあ、そうだろう？……物理部顧問、寺尾正造センセイ？」

寺「な…？！」

熊「先生が、篠原を…？！」

遠「そんな、まさか…！」

賢一の放った言葉に、名前を出された寺尾はもちろん、物理部員もメディア部員も、みな驚きを隠せない。

寺「い、いきなり何を言い出すかと思えば…私が篠原を殺した犯人だって？……はは、バカバカしいにも程がある。」

賢「バカバカしい、か。フン……お前、自分の生徒に罪を押し付ける気か？」

皮肉そうに小さく笑ってそう言う賢一に、寺尾は衝動的に眉をひそめる。

寺「な、に…？」

賢「オレの話を聞いていたら、の話だが…お前が犯人じゃないのなら、必然的に容疑は物理部員に及ぶだろう？」

寺「わ、私は別にそんなつもりで言ったわけでは…第一、物理部員たちに犯行は可能だと言う状況の中で、なぜ私が犯人にされるんだ？！」

焦りを隠そうとして、余計に慌ててしまう寺尾だったが、そんな寺尾を見て晶も不思議そうに賢一を見る。

晶「そうだぞ、ヨシ…じゃなくて、えっと……ああ、もう！とにかくだ！お前な、何を根拠に寺尾先生が犯人だと言ってんだ？」

賢「篠原が、何も相談せずに帰ったこと。それが根拠の１つ目だ。」

孝「篠原さんが帰ったこと？それがどうして…」

賢一の言葉を不思議がる孝彦に、賢一はどこか面倒くさそうな顔をする。

賢「……篠原が部室を出る前に起きたことは何だ？」

修「えっと、隆平くんと孝彦くんがいつものようにケンカをして…」

賢「それより前だ。」

修「え？んーと……そうです！鳩谷先生が模造紙を持ってきてくれました！」

賢「そう。篠原は鳩谷が来たことで、話をやめて帰ってしまった。」

霧「それがなんだってんだ？」

賢「つまりだ。篠原の相談と言うのは、教師がいる空間ではできない話だったんだ。おそらくは教師の誰かが…詳しくはオレも見当がつかないが、何か、真面目なアイツの見過ごせないことをしている現場を見てしまったんだろう。メディア部に対して調べものは得意か？と訊いてきたあたり、その教師が誰かを調べてもらいたかったんじゃないか？」

賢一の話を聞いて、陽は納得したように言う。

陽「そっか、その教師って言うのが誰かわからなくて、鳩谷先生の可能性もあったから、篠原さんは帰っちゃったんだ。」

賢「ああ。鳩谷が来る直前に「昨日の夜」と口走っていたことから考えても、間違いないだろう。暗い中では、顔なんかよく見えないからな。」

寺「デ、デタラメだ！私が篠原の見過ごせないことをして、それを見られたから口封じに殺したとでも言いたいのか？そんなもの、お前の推論でしかないだろう！」

川「そうよ！…寺尾先生のような方が、そんなひどいことするわけが―」

賢「なんで換気扇も回さず、部屋を閉め切って掃除なんかしてたんだ…」

川西の言葉を遮り、賢一は静かにそう言う。

熊「え？」

賢「これが根拠の２つ目、オレが最初に準備室を調べに来た時、寺尾が言った言葉だ。」

隆「そういや、そんなこと言ってたような…」

寺「それが、どうしたと言うんだ…」

賢「わからないか？この言葉の持つ意味が…」

そう言う賢一としばし睨みあった寺尾だったが、その沈黙を破ったのは賢一だった。賢一はふっと寺尾から目を逸らし、スイッチ盤の方へと歩き出す。

路「お、おい…」

賢「なんで換気扇も回さず…」

そう言って、賢一は準備室の換気扇のスイッチを切った。

寺「！」

賢「佐武のガキが撮った篠原発見時のビデオには、しっかり稼働している換気扇が映っていた。それから、オレが電灯や換気扇のスイッチをいじったか、と聞いた時、誰一人としていじった者はいなかったうえに、遠藤はこう言った。「換気扇はずっと回してる」と。じゃあ、なぜお前は知っていたんだ？篠原が掃除をした時に換気扇は回っていなかったと。」

寺「そ、それは…篠原が掃除をする時に、換気扇を止めていたのを見たから…」

そう言う寺尾の言葉には、すでに落ち着きは消え失せている。

賢「お粗末な言い訳だな。じゃあ、誰が何のために再び換気扇を回した？部屋から出られなかった篠原には到底無理な話だぞ？」

寺「それはさっきお前が言っただろう？！換気扇を回したのは、減圧状態を解除しようとした犯人で…とにかく私は篠原を殺してなんか―」

必死にそう言う寺尾を見て、賢一は呆れるように深くため息をつく。

賢「そこまで言うなら、指紋でも取るか？」

寺「指紋、だと？！」

賢「お前の言い分を信じるのならば、篠原が換気扇を止めた後に、犯人が減圧状態を解除するために換気扇を回したということになる。…とすればだ、お前たちは篠原を見つけてから誰もスイッチに触っていないと言うのだから、その換気扇のスイッチの一番上についている指紋が、犯人を示しているということになるだろう？それでお前以外の指紋が出れば、オレの早とちり、ということになるが…どうする？」

寺「くっ…」

悔しそうにそう漏らした寺尾は、拳に入っていた力をフッと抜いて言った。

寺「ダメだな…」

熊「え？」

寺「そんなことをされちゃ、もはや言い逃れは不可能だよ……」

遠「先生…そんな…！」

晶「認める…ということですか？」

落ち着いてはいるものの、晶もどこか信じたくない、と言ったような顔をしている。

寺「ああ。そうさ、私が篠原を事故に見せかけて殺したんだ。…警察の目をごまかせたところまではうまくいったのに、やはり、昨日突発的に思いついた方法じゃ、見抜かれるのが関の山か。」

そう語る寺尾の顔には、もはや反論する気も失せきっていた。

川「でも、なんで先生が美紅ちゃんを！？どうして？！」

寺「どうして、か…フフ、ほとんど彼の言った通りだよ。口封じさ。」

海「口封じ……」

寺「篠原に見られてしまったんだ、私が来年度の大学の入試問題を横流しする約束をしていた生徒から、金を受け取るところをな。」

孝「入試問題の横流しって……」

寺尾の告白には、孝彦だけでなくその場にいるほとんどの人間が驚いたようだった。

寺「私の兄が、その生徒の志望する大学で入試試験の管理をしていてね、入試問題の入手自体はそれほど難しくないんだよ。」

隆「あの…そーゆーのはよくわかんないんですけど、その……」

何と言えばいいのか言葉に詰まる隆平を見て、寺尾はどこか追い詰められたような表情をする。

寺「……息子が詐欺まがいの被害にあってしまってね、その事を相談されたのは、すでに借金をして金を騙し取られてしまった後だった。……しかも相当慌てていたんだろう、ろくに調べもしないで性質の悪い金貸しから金を借りてしまったらしくて、今は毎日借金取りから逃げ回ってると言っていたよ。……連絡も向こうからの電話を待つしかなくて、たとえ電話をくれたってどこにいるかは教えてくれないんだ。」

そして、寂しそうな表情を浮かべ始める。

寺「とてもいい子なんだ。……騙されたこと自体、息子の人の好さを利用したような手口だったし、居場所を教えてくれないのだって、きっと私に迷惑をかけたくないとでも思っているからだろう。……電話をくれる度に元気のなくなっていく声を聞いて、親として助けてやりたいと思うのは当然だろう？そこで、もともと話を持ち掛けられていた入試問題の横流しの件を呑むことにしたんだよ。向こうが提案してきた報酬額なら、十分息子の借金を返せたからね。それでこっちの事情も話して、先に金を受け取ることにしたんだ。」

霧「先生んとこ、そんなことになってたんスか……」

どこか同情するようなその言葉に、寺尾は自嘲するように言う。

寺「……あの夜、物理部だけでなく、他の部活もとっくに活動を終えた時間を選んで物理室にその生徒を呼び出して金を受け取り、これで息子を助けてやれると思った矢先に廊下から物音がしてな、廊下を覗いたら篠原が慌てた様子で走って行くのが見えたんだ。念のために電気を消しておいたのが幸いしてその時は顔を見られずに済んだようだが、次の日にそれとなく彼女を見張っていたら、彼女は君たち…メディア部を頼ろうとしていた。」

そう言って、寺尾はどこか諦めるような目でメディア部員たちの方を見る。

寺「できてからまだ数年目とはいえ、君たちの情報収集能力の高さは大したものだという評判だ。篠原が君たちに相談をしてしまったら最後、息子を助けることはできなくなってしまう……だから君たちの部室に入って行く篠原を見た時は、もう終わりだと思ったよ……」

そこまで聞いて、陽はフッと不安げな顔をする。

陽「じゃあ、あの時鳩谷先生が来たのって、もしかして……？」

寺「いや、それは偶然だ。私が、篠原が相談をしないで帰ったことを知ったのは、篠原がメディア部の部室を出てからだからな

―寺（Ｍ）「あの時、篠原をメディア部の部室の外から監視していた私は、篠原が部屋を出てきたのを見計らって、偶然を装ってそれとなしに訊いてみたんだ。」

廊下の死角に立ってメディア部の部室を見ていた寺尾の目に、たった今部室から出てきた篠原の姿が映った。それと同時に、寺尾はゆっくりと篠原の後を追うように歩き出す。

寺「篠原、どうした？こんなとこで…」

篠「あ、寺尾先生……いえ、ちょっと、メディア部に相談したいことがあって…でも、忙しそうだったから、また明日来ようと思って。」

寺「なんだ、何も話してこなかったのか？」

篠「ええ。」

寺「そうか。…もし私でよかったら、話だけでも訊くぞ？」

篠「いえ、大丈夫です。大したことじゃないですから。」

少し疲れた顔でそう言った後、篠原は小さく会釈して物理室へと向かって行った。―

寺「今日中にコイツの口を塞がなければ、メディア部は動き出す。…そうなる前にと、そう思って篠原を事故に見せかけて始末しようと決めたんだ。」

そう語る寺尾の口調は、冷静を装ってはいるものの、どこか後ろめたさを帯びていた。

熊「先生、あの…１ついいですか？」

寺「なんだ？」

熊「もし…もし昨日、遠藤が部活を休んでいなかったら、篠原を殺したりはしなかったんですか？……先生が口を塞ぎたかったのは、篠原だけだったんでしょう？」

熊谷の問いに、寺尾はふっと自嘲するような、疲れ切った笑みを見せる。

寺「逆だな…」

遠「え…？！」

寺「もはや私には、篠原があの部屋で掃除をするあの時しか時間はなかった。そこに誰がいようと、一緒に死んでしまえば問題はない。」

遠「な…！」

恐ろしさに思わず顔に手を当てる遠藤。そんな遠藤を見て、賢一は小さくも眉をひそめる。

賢「もういい……」

寺「何だって…？」

賢「強がるな。今の、誰を殺そうとかまわないと言う話……自分で手にかけたとはいえ、生徒の死に涙を流すような人間の口から語られる話ではないと思うが。」

川「え……なにそれ、どういうこと？」

その時、熊谷が思い出したかのように賢一の方を見る。

熊「あ、もしかしてさっき部室に来た時に先生のこと見てたのって……」

晶「さっき、って…なんかあったのか？」

そんな熊谷を、晶も不思議そうに見る。

熊「いや、さっき部活始まる前に彼がここに来てさ、準備室をもう一度見たいって。その時に先生がほら…」

そう言って熊谷は準備室へのドアまで歩いて行き、ドアを開けた。

熊「あの花、あっちの背の高い花は遠藤が活けてくれたんだけど、他のはもともと先生が持ってきたものなんだ。それでさ、神童くんが来た時、先生、あの花の前で手ぇ合わせてたんだ。それで神童くんが来たって知らせて先生が部屋を出る時に、彼、何かに気付いたみたいにずっと先生の方を見てたんだけど……そっか、先生泣いてたんだ……」

賢「泣いてた、というほどのものでもないかもしれない。だが、あの時の寺尾の目は明らかに充血してたし、潤んでもいたように見えた……あの時は熊谷もオレも、別に寺尾を見ていたわけではないからな、悲しむ演技をする必要もないだろう？なのに寺尾は泣いていた。……後悔、もしくは反省をしているうえで、これ以上何を背負おうとする？」

その言葉に、寺尾はどこか意外そうな驚きを見せている。そして、それは意味は違えど陽も同じだった。そして少しの沈黙の後、賢一は静かに出入り口へと踵を返した。

路「おい……」

心配そうに声をかける龍路だったが、まるで聞こえていないかのように何の反応も見せない賢一。そして物理室を出ようとする直前に立ち止り、みんなに背を向けたままに話し始める。

賢「オレは別に、警察の手助けをするために篠原を殺した人間を暴いたわけではない。これからどうしたらいいかは、お前が自分で考えるんだな。」

霧「…どーいうことだ？」

不思議がる生徒たちの中で、霧江が先陣を切って口を開く。

遠「もしかして、自首しろってことでしょうか……」

そんな話を聞いて、物理室の出入り口に近い所に立っていた修丸が、少しおどおどと訊く。

修「そういうこと、なんですか……？」

その問いに、賢一は振り向きもせずにそっと自分の胸に手を当てて切なげな顔をする。

賢「さあな……まあ、少なくともアイツなら、たとえ相手が殺人犯だとしても、ここまで追い込まれた人間をこれ以上追い詰めようとはしない。」

そこまで言って、賢一は寺尾の方を振り返った。

賢「ここにいる人間全員がそれを許すのなら……篠原を殺したことを悔いているのなら……今のうちに自首することを勧めておく。」

そうとだけ言って、賢一は部室を出て行った。

寺「篠原……」

緊張の糸が切れたのか、寺尾はこぼすようにそんな言葉をつぶやいた。そして、その瞬間に頭をよぎっていくのは、後悔が見せた幻だったのか……

―篠「あの、寺尾先生って物理部の顧問なんですよね？」

物理の授業が終わると同時に、教卓の上を整理している寺尾のもとに元気よく駆けてきてはそう言う篠原。

寺「ああ、そうだよ。」

優しいその言葉に、篠原は嬉しそうに、そしてどこか緊張気味に言う。

篠「……あの、入部届って先生に出せばいいんでしょうか？」

その言葉に寺尾は小さく驚くも、嬉しそうに言う。

寺「もしかして、入部希望かい？」

篠「はい！あの、それで今日見学とかって……」

寺「大丈夫だよ。……２階の物理室はわかるね？放課後待ってるから、遠慮せずにおいで。」

篠「ありがとうございます！」―

―篠「霧江先輩！…学校では携帯の電源切らないとだめですよ！」

霧「わぁったよ、ったく……」

部活の最中に、癖で携帯で時計を見ようとした霧江を見て、篠原が注意をしている。

熊「篠原はホントに真面目だな。…霧江とは正反対だ。」

川「ホントですね！…でも美紅ちゃん、あんまり真面目すぎると疲れちゃうかもよ？」

その言葉に、篠原は少し困った顔をする。

篠「あの、やっぱ真面目すぎるって問題ですか？」

そんな篠原に、寺尾が優しく言う。

寺「問題なんかじゃないさ。…自分の思ったことをはっきり人に伝えられるのはなかなか難しいことだし、それをしっかりとできる篠原は大したものだよ。」

篠「先生……」―

―授業の終わりに、授業中の疑問を質問し終えた篠原は教卓でノートをまとめながら嬉しそうに言う。

篠「先生の説明って、私すごく好きです！」

寺「そうか？」

少し苦笑気味にそう言う寺尾に、篠原は続ける。

篠「はい！……わかりやすいっていうか、その人に合った教え方をしてくれるでしょう？そう言う先生、他の教科ではあんまりいないから……」

寺「ありがとう、篠原。そう言ってくれると教えがいがあるってもんだよ。」

篠「私、教師じゃなくっても、先生みたいに関わる人、１人１人と向き合えるような大人になりたいなぁ…」

憧れを抱いてそう言う篠原を、寺尾はどこかくすぐったそうに見ていた。―

―部活が終わり、篠原が掃除をしようと準備室に入ったのを見て、ためらうようにその後をついて行く寺尾。

篠「あれ、先生どうしたんですか？」

寺「ああ、いや……ほら、洗剤が無くなりかけてた気がしてね、これを渡してから帰ろうと思って。」

そう言って寺尾が手渡したのは、酸性の洗剤だった。

篠「あ、ありがとうございます！……結構面倒くさいんですよね、洗剤もらいに行くのって。」

苦笑いしてそう言う篠原に、寺尾はすでに、素直に笑ってあげられなかった。

寺「じゃ、じゃあ私もそろそろ行くよ。……ドアのとこ、掃きづらいだろうから閉めていくよ。」

篠「はーい！」

篠原がそう言って掃き掃除を始めたのを見計らい、寺尾は吹奏楽部の音に稼働音が紛れることをいいことに、篠原が見ていない隙に静かに真空ポンプのスイッチを入れ、逃げるように物理室を後にした。

寺「（すまない……！だが、あのことがバレては、あの子の借金は返せないんだ……！）」

悔やむ気持ちをぬぐい切れずに、寺尾は廊下を走って行った。―

寺「すまない……篠原……！」

流しこそしなくとも、先ほど賢一が言っていたのと同じように、目を充血させて涙を溜め、悔いるようにそうつぶやく。

熊「先生……」

不安げに寺尾を見る熊谷に、寺尾は小さく、どこか荷が下りたような顔で笑う。

寺「自首をすれば少しでも罪が軽くなる…そんな思いで自首をしに行くわけではないと、篠原はわかってくれるだろうか……」

川「大丈夫ですよ……美紅ちゃんなら、きっと先生も辛かったんだってわかってくれます……」

川西の言葉を聞いて、寺尾は安心したような表情を見せる。

寺「そうか……」

一言そう言って、寺尾はメディア部員たちの方を見る。

寺「君たちにも迷惑をかけてしまったな……」

そう言ってから、寺尾は出入り口へと歩き出す。

寺「よかったら、「犯行を悔いていることに気付いてもらえて、救われた気分だ」と、神童くんに伝えてくれ。」

出入り口の付近でそう言う寺尾。

陽「わかりました……」

陽の答えを聞いて、寺尾は部室を出て行った。

遠「でも……神童くんの言ってた「アイツ」って、誰のことなんでしょうね？」

霧「さあな……親友とか、そーゆう人じゃねえのか？」

そう不思議がる物理部員たちの横で、メディア部員たちも何かを不思議がっている。

孝「にしても賢一の奴、１人で篠原さんの死の真相を突き止めちまうなんて……」

晶「先生が泣いてたことに気付くとか、人の感情に敏感なとことかはいつも通りの気もするが……あの人を寄せ付けない雰囲気とか、頭の回転の速さや記憶力は、常人の物じゃなかったよな。」

路「まったく、どうなってんでしょうね……」

そんな話を聞きながら、陽はどこか不安げに物理室の出入り口を見つめていた。

家に帰った賢一はまた自分の部屋に閉じこもり、陽は彼を気遣って、部屋の外側のドアによしかかっていた。

陽「寺尾先生がね、あなたにお礼を言ってたわ。犯行を悔いていることに気付いてくれて救われたって。」

賢「……。」

陽が部屋の外にいることにとっくに気づいていた賢一も、陽はわからなくとも、同じくドアを背に立っていた。そして何も答えない賢一だったが、陽はふと話題を変えてくる。

陽「……。ねえ、アイツってヨシくんの事でしょ？」

賢「だったらどうした。」

陽「どうした、ってことはないけど…でも、よかった。」

賢「よかった？何が……」

陽「あなたとヨシくん、全然性格が違うからもっと平気で冷酷なことができるかと思ってて、少し怖かった。けど、あなたは先生にとって一番いい方法を選ばせてくれたから。あなたが事故ではなく事件だって調べてくれたことで、篠原さんもきっと浮かばれただろうから……」

賢「フン……。勘違いするな。オレはただ、篠原を事故に見せかけて殺し、ほくそえんでいる野郎の面を拝みたかっただけだ。それに、なぜ篠原が有毒ガスの発生する部屋から逃げ出さなかったのかも引っかかっていたしな。……あんなの、ただの暇つぶしだよ―」

陽「嘘。」

賢一の言葉を遮り、優しくも力強くそう言う陽。

賢「な―」

陽「あなた、ヨシくんのために事件を解決してくれたんでしょ？」

賢「賢一の為だと？……フン、寝言は寝て言え。」

陽「寝言なんかじゃないわ。篠原さんを殺した犯人は、ヨシくんの心を追い詰めた犯人でもある……こう言ったら篠原さんに悪いかもしれないけど、あなたはヨシくんを傷つけた犯人が許せなかった。篠原さんの死に関して、悪いのはヨシくんじゃないって教えてあげるために、事件のことを調べて―」

賢「寝言は寝て言えと何度言わせりゃ気が済む！なんでオレがアイツのために……ったく、お前と話していると調子が狂う。」

陽「ごめんなさい。」

そう言いつつも、陽の声は優しかった。そしてしばらくの沈黙が訪れる。

賢「……。賢一に、自分を責めるなと伝えておけ。」

陽「え？」

聞き返す陽だったが、賢一はもう一度言うでもなくベッドへと歩きはじめる。

賢「バカどもの相手をしまくったせいで疲れた。オレはそろそろ休む。」

陽「あ……ちょっと待って！」

その一言に、賢一はベッドとドアの中間あたりで立ち止まり、ドアの方を向く。

賢「……ったく、休むだけで何を待てと言うんだ…」

陽「えっとね……その、ありがとうって言いたくて。」

賢「それは、なんの礼だ……？」

陽「あなたのおかげで、ヨシくんはきっとまた元気になってくれる気がするから……あとなんとなくだけど、あなたがいてくれるおかげでヨシくんも存在している気がして……だから、ありがとう。」

賢「そんなことで礼を言われる筋合いはない……話はそれだけか？」

陽「うん。ごめんね、疲れてるのに……」

そう言って、陽は少し迷うように言葉を呑む。しかし、決意と優しさに満ちた顔で賢一の部屋の方を見る。

陽「ゆっくり休んでね。……ケンイチくん。」

賢「ケンイチ……」

豹変してからは珍しく、不思議がるような口調の賢一に、陽は優しく言う。

陽「ヨシくんの名前で呼ばれるのが嫌なら、あなたも名前を持てばいいと思って。」

賢「名前だと？そんなもの、オレには必要ない。」

陽「いいえ、きっと必要な物よ。あなたはちゃんと存在している。なのに名前がないなんて、それは悲しすぎるじゃない……あのね、賢一（よしかず）って書いて、ケンイチって読むの。……いや？」

賢…ケ「フン……勝手にしろ。」

その一言に、陽は嬉しそうな顔をする。

陽「今回は本当にありがとう。おやすみ、ケンイチくん…」

ケ「…おい、宗光。」

賢一の部屋の前から去ろうとする陽を、賢一…ケンイチがそっけなくも呼び止める。

陽「え、何？」

ケ「……」

陽「ちょっと、ケンイチくん？」

不思議がってドアを開けた陽の目に飛び込んできたのは、ベッドに座っている見覚えのある顔だった。

賢「あ…」

陽「ヨシ、くん……？」

賢「ひな……」

陽「ヨシくんに戻ったのね……」

安心したようにそう言う陽に、賢一は少し黙り込んでから、申し訳なさそうに言った。

賢「心配、かけちゃったね…ごめん…」

陽「知ってるの？あなたが気を失ってからのこと…」

賢「うん…うまく言えないけど、彼の行動はとか話したこととかは伝わって来ていたし、彼が見聞きしたことだって、全部僕も感じてた。事件のことも、ひなのことも……あと、さっきのケンイチって名前のことも。」

陽「そう…」

何とも言えない複雑な表情でそう一言答える陽に、賢一は優しく笑って言う。

賢「ケンイチ……すごくいい名前だと思うよ。彼、きっと喜んでくれてるんじゃないかな？」

陽「そうかしら……顔は見ないで話してたからわからないけど……」

賢「僕だって本当はどうかなんてわからないけど……でも、すごくそんな気がするんだ。「嬉しい」って気持ちが、伝わる気がする……」

陽「そう……よかった……」

そう言って、陽は賢一の顔を優しく見た。

陽「……もう、大丈夫なの？」

賢「うん。……ケンイチのおかげ、かな……―！」

そう言う賢一を、陽の腕が優しく抱え込む。その抱擁に、賢一も嬉しそうに陽を軽く抱き返した。

陽（Ｍ）「私はそれ以上何も言わずに、ただギュッとヨシくんを抱きしめてあげるだけでした。ヨシくんも、私と同じで何も言わず、そんな私を抱き返してくれて……ヨシくんが帰ってきた。それも、あの優しい笑顔が壊れないままで……それが誰のおかげか、私は絶対に忘れない。ヨシくんを守ってくれて、ありがとう。ケンイチくん……」

陽・賢「いってきまーす！」

父「おう、気をつけてなぁ！」

翌朝、いつもの時間に２人は玄関を出たが、それが間違いだったことに気付くのすぐ後のことである……

賢「あ、チャリンコがない！」

陽が玄関の戸を閉めている時、自転車を置いている場所からそんな声が聞こえる。

その一言に、陽は珍しく心の底から呆れてしまう。

陽「え？！…あ、そうよ！ケンイチくん、自転車乗れないからって学校に置いてってたんだった！…って、ヨシくん、ケンイチくんの行動も知ってるんだじゃなかったの？」

賢「いや……その、そうなんだけどさ……すっかり忘れてた…」

陽「もう～、しっかりしてよ…」

そう言ってむくれた陽だったが、バツ悪そうにしている賢一と目が合うと、２人でにっこり笑った。

陽「遅刻なんて嫌だから、走るわよ！」

賢「うん！」

陽「でも、疲れたら私のペースに合わせてよね。」

賢「了解しました！」

わざとらしい敬語の後に、２人は一緒に走り出す。

陽（Ｍ）「確かにケンイチくんはすごかった。もしケンイチくんが現れないでヨシくんのままだったら、篠原さんの死の真相はきっと明かされなかっただろうから。でも、頭が悪くたって、不器用だって、ヨシくんはヨシくんなんだから…ただそれだけで私はいいの。そんなヨシくんが私の隣にいてくれることが、私の……大切な当たり前だから…」

賢「ひな、早くー！」

陽「わかってるー！」

走りながら、陽は思い出したかのように賢一を見た。

陽「そう言えばヨシくん、宿題終わったの？」

賢「終わるわけないじゃん。」

陽「またあ！そんなことじゃあ留年しちゃうよ？」

賢「大丈夫だよ、体育の成績はいいんだから。」

陽「もう～！高校はそんなに甘くないんだから…」

今日もまた、こうして「当たり前」の１日が始まろうとしていた…